『イエスを信じますか？』ヨハネ8:21-30

8:21 さて、また彼らに言われた、「わたしは去って行く。あなたがたはわたしを捜し求めるであろう。そして自分の罪のうちに死ぬであろう。わたしの行く所には、あなたがたは来ることができない」。
8:22 そこでユダヤ人たちは言った、「わたしの行く所に、あなたがたは来ることができないと、言ったのは、あるいは自殺でもしようとするつもりか」。
8:23 イエスは彼らに言われた、「あなたがたは下から出た者だが、わたしは上からきた者である。あなたがたはこの世の者であるが、わたしはこの世の者ではない。
8:24 だからわたしは、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろうと、言ったのである。もしわたしがそういう者であることをあなたがたが信じなければ、罪のうちに死ぬことになるからである」。
8:25 そこで彼らはイエスに言った、「あなたは、いったい、どういうかたですか」。イエスは彼らに言われた、「わたしがどういう者であるかは、初めからあなたがたに言っているではないか。
8:26 あなたがたについて、わたしの言うべきこと、さばくべきことが、たくさんある。しかし、わたしをつかわされたかたは真実なかたである。わたしは、そのかたから聞いたままを世にむかって語るのである」。
8:27 彼らは、イエスが父について話しておられたことを悟らなかった。
8:28 そこでイエスは言われた、「あなたがたが人の子を上げてしまった後はじめて、わたしがそういう者であること、また、わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えて下さったままを話していたことが、わかってくるであろう。
8:29 わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない」。
8:30 これらのことを語られたところ、多くの人々がイエスを信じた。

●序論
　お金持ちとその門で物乞いをしてたラザロが共に死後の世界に迎えられる話。
　金持ちは陰府で苦しみラザロはアブラハムのふところで慰めの中にある。
　金持ちは訴えます。　≪リビングバイブル≫ルカ16:24~
　　24金持ちはあらんかぎりの声を張り上げました。『アブラハム様！　どうぞお助けを。お願いでございます。ラザロをよこし、水に浸した指先で、ほんのちょっとでも舌を冷やさせてください。この炎の中で、苦しくてたまりません。』 25しかし、アブラハムは答えました。『思い出してみなさい。おまえは生きている間、ほしい物は何でも手に入れ、思うままの生活をした。だがラザロは、全くの無一物だった。それで今は反対に、ラザロは慰められ、おまえは苦しんでいる。 26それに、そちらとの間には大きな淵があって、とても行き来はできないのだ。』
この聖書が語るところのどんなに聞きづらいお話も、記されてわたしたちに伝えようとする神さまの御意志があります。罪とその結末の恐ろしさに気づきを与え、今、救いを求めることができるようにということです。
　　8:21 さて、また彼らに言われた、「わたしは去って行く。あなたがたはわたし

を捜し求めるであろう。そして自分の罪のうちに死ぬであろう。わたしの行く所には、あなたがたは来ることができない」。

「罪の内に死ぬ」ある意味、あの金持ちのありさまを見る思いがする怖い言葉です。
この語りかけから気づきを得ることができるように導かれています。

●本論

Ⅰ．罪の内に死ぬということ

これまでいくつものところでイエスさまはある意味ストレートに、わたしたちに同様のことを語ってくださっていることに気づくのです。

たとえば、このヨハネの福音書3章での教師ニコデモの対話にこうあります。

3:3 イエスは答えて言われた、「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」。

罪の性質をそのままに天の御国に入ることはできない。新しく生まれなければ…と語る言葉です。あのニコデモも当初その言葉ははわかりませんでした。けれども分かるようにされていくのです。　その続きにこうもありました。

3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

自分の罪の内に滅びたらよいのだ…いうのではなく、人をその罪から救うために神はひとり子を遣わされたのだということです。だから今日の個所では、こう記しています。

8:24 だからわたしは、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろうと、言ったのである。もしわたしがそういう者であることをあなたがたが信じなければ、罪のうちに死ぬことになるからである」。

「自分の罪のうちに死ぬ」ということは現実は今もあります。
だからこそイエスさまは、そして福音書記者たちは、聖霊さまは、聖書を通して聞く、今のわたしたちにも迫っているのです。「罪の内に死なないように！･･･」と。

Ⅱ．イエスさまを知ること信じること

8:25 そこで彼らはイエスに言った、「あなたは、いったい、どういうかたですか」。イエスは彼らに言われた、「わたしがどういう者であるかは、初めからあなたがたに言っているではないか。

イエスさまにとってはどうにも歯がゆいと感じる対話でしょう。
さてここまでお読みして、このユダヤ人たちの鈍さと不理解のありさまは、彼らだけの問題ではなく、ああ、わたしだな…と気づかされることがあります。

わたしは先週のポイントのひとつで「霊的成長が鍵となる」とお話しました。

イエスさまの言葉も態度もわたしたちの馴染んでいる枠や標準をはるかに超えている。いやその愛の大きさ深さは、わたしたちの常識を超えて、いや揺り動かして、すべてを貫いている。当時の人々の目にそれが受け入れがたかったように、今のわたしたちもまたそう感じるものだとお話しました。

そんなわたしにイエスさまはこう語られるのです。

8:24 だ･･･もしわたしがそういう者であることをあなたがたが信じなければ、罪のうちに死ぬことになるからである」。

「そういう者であることをあなたがたが信じなければ」とある。それは「エゴー・エイミー」「わたしはある」というあまり聞きなれない表現です。

:24(新共同訳）…『わたしはある』ということを信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」

イエスさまは、御自身を初めからある存在、として時を超えて初めにも今も、そして未来にもある永遠の存在、つまり神、そのお方としてご自身を示しているのです。

まさにヘブル人への手紙で言われている通りです。

ヘブル13:8 イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない。

今、わたしたちが生きる時代の変化、争いや敵意や憎しみが渦巻き、不安や悩みが現実に押し迫る。これからもっと時代は変化します。倫理観やモラルの標準と言われるものさえ形を変え、わたしたちに押し迫ることを経験するでしょう。

しかし、それでもなおわたしたちは、「わたしはある」と言われたイエスさまを見上げるならば、この方に不変の愛と真実を見いだすことができます。

だから思い出してください。イエスさまは今を生きるわたしたちにも言われるのです。

:12･･･「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

Ⅲ．その救いを信じること

8:28 そこでイエスは言われた、「あなたがたが人の子を上げてしまった後はじめて、わたしがそういう者であること、また、わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えて下さったままを話していたことが、わかってくるであろう。

ここで「わかってくるだろう」となるきっかけが記されています。

「あなたがたが人の子を上げてしまった後」だと。

つまりそれは、あの十字架のありさまをさしています。

わたしたちが思うのは、いやそれでは、手遅れでしょう。イエスさまを十字架につけてからでは…。その前に何とかイエスさまのことがわかる者でなければ…と思うのです。

しかし、事実、わからなかったからこそ、気づけなかったからこそ、いやむしろ憎み呪う心をイエスさまに向けて人はこの方を十字架につけた。それが事実です。

しかし、そうしてはじめて、わたしたちは神の子さえも十字架につけてしまうほどの罪びとであることがわかるようになる、それが今日語られるとこです。

事実、罪のない方が、わたしたち罪あるものの身代わりとなられた、それが十字架が示す真実だからです。

三浦綾子さんの「塩狩峠」。主人公が救われるきっかけになった伊木一馬の説教。

みなさん、しかしわたしは、たった一人、世にもばかな男を知っております。その男はイエス・キリストであります。イエス・キリストは、何ひとつ悪いことはなさらなかった。生れつきの盲人をなおし、生れつきの足なえをなおし、そして人々に、ほんとうの愛を教えたのであります。ほんとうの愛とは、どんなものか、みなさんおわかりですか。みなさん、愛とは、自分の最も大事なものを人にやってしまうことであります。最も大事なものとは何でありますか。それは命ではありませんか。このイエス・キリストは、自分の命を吾々に下さったのであります。彼は決して罪を犯したまわなかった。人々は自分が悪いことをしながら、自分は悪くはないという者でありま

すのに、何ひとつ悪いことをしなかったイエス・キリストは、この世のすべての罪を背負って、十字架にかけられたのであります。彼は、自分は悪くないと言って逃げることはできたはずであります。しかし 彼はそれをしなかった。悪くない者が、悪い者の罪を背負う。悪い者が悪くないと言って逃げる。ここにハッキリと、神の子の姿と、罪人の姿があるのであります。
しかもみなさん、十字架につけられた時、イエス・キリストは、その十字架の上で、かく祈りたもうたのであります。いいですか、みなさん。十字架の上でイエス・キリストはおのれを十字架につけた者のために、かく祈ったのであります。
「父よ、彼らを許し給え、そのなす所を知らざればなり。父よ、彼らを許し給え、そのなす所を知らざればなり。」
聞きましたか、みなさん。いま自分を刺し殺す者のために、許したまえと祈ることのできるこの人こそ、神の人格を所有するかたであると、わたしは思うのであります。
このメッセージを聴いた永野青年は、このイエス・キリストこそ救い主だと確信した伝えます。　そんな彼に、厳かに伊木一馬は尋ねます。「誰がイエスを十字架にかけたと思いますか？」　しばらく思いあぐねる永野青年に、伝道者伊木一馬はこう語りました。「キミですよ」と。　永野青年の反応ははっきりしていました。「自分はイエスを十字架にかけた覚えはない」と。
伊木一馬は答えます。「それでは、君はキリストとは何の縁もない人間ですよ」と伊木伝道師、さらに続けます。「永野くん、これは僕が試みたことなんだが、聖書のことばを徹底的に実行する。そうすれば、あるべき姿に自分がいかに遠い存在かを知るんじゃないかな」と言って、彼を帰します。
そうしてのち、主人公の永野青年は、聖書の言葉の実践の中で自分の罪を知らされ、まさに自分が、キリストを十字架につけた張本人なのだという自覚に至り、本当の意味でイエス・キリストを救い主として信じます。
（リビングバイブルで）
8:28「あなたがたは、わたしを(十字架上に磔にして）殺してはじめて、わたしがメシヤ(キリスト・救い主)だったと気づくでしょう。そして、わたしが自分の考えではなく、父から教わったことを話していたとわかるでしょう。
最初に申し上げました。今日聞いた「あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろう」という言葉は耳を塞ぎ、目をそむけたくなるような響きの言葉です。でもそれだけで終わらない救いの福音の言葉が、わたしたちに向けられている、これが聖書の世界です。
どんな現実の悩みや憎しみや敵意の渦巻く世界の下でも救う福音がここにあります。
テトス 3:3-4
:3 わたしたちも以前には、無分別で、不従順な、迷っていた者であって、さまざまの情欲と快楽との奴隷になり、悪意とねたみとで日を過ごし、人に憎まれ、互に憎み合っていた。
:4 ところが、わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが現れたとき、
:5 わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである。
はっきりと「わたしたちは救われたのである」と言える救いの世界があるのです。
この世界は、あなたの世界です。共に聖霊の励ましを受けて、祈り合い前進しましょう。